

昭和二十七年十月から昭和五十五年六月まで

随想と記録

長男 正樹の思い出

昭和四十一年八月に執筆したもので『春風秋雨』の後編「希望と憂愁」の随想欄に収録。のちに加筆訂正して『私の履歴書』にも収録

長男正樹は、昭和十二年二月六日、横浜の磯子で生れた。当時私は横浜税務署長で、横浜市磯子区の芦名橋で小さい借家住いをしておった。それはすぐ隣の杉山さんの持家で、磯子の浜から一町ほど離れたところにあり、横浜から金沢に通ずる街道を右にちよつとはいった、どこか磯の香のする閑静な住居であった。私と妻は、生れて間もない長男を抱いて、磯子の浜辺を借家園の方向によく散歩したものであった。

当時の横浜は、関東大震災の傷跡が未だに残っており経済的には相当疲弊しており、従って担税力も乏しかった。外国貿易の主導権は当時すでに日本橋や丸之内に移り、横浜は主体性を失った中継貿易港に転落しつつあった。当時横浜には半井知事、青木市長、高橋税関長がおられた。この三人の先輩は定期的に私を昼食に招いてくれたりして、何くれとなく指導して下さった。また市井の人々には、いわゆる「浜っ子」という特有の気質があって、コスモポリタンのな東京人とはちがって、何となく親しみやすかった。私もだんだん横浜に惹かれるようになり、その後東京の大蔵本省に勤務するようになってからも、横浜の本牧に自宅を構えて、三年ほど厄介になったものである。

その年の七月、私は仙台国税局（当時の税務監督局）の間税部長に転勤を命ぜられたので、私どもは正樹を連れて仙台に赴任した。彼はその頃どちらかといえば蒲柳の質で

よく病気をしたし、疳の強い神経質の子で医者世話になることが多かった。昭和十四年六月、東京に帰ってからは牛込に住み、戦争末期に九段の暁星学園初等科に入学した。神楽坂を下りて、国電飯田橋駅の前を通って通学してあった彼のあどけないランドセル姿が今なお忘れられない。このミッション・スクールに入学したが、後年彼がキリスト教に入信する機縁になったものと思う。

昭和二十年に入って戦争はいよいよ最悪の段階に踏み込み、空襲は日増しに激化していった。牛込の私の家の前には川合玉堂画伯、左横隣は歌舞伎の中村吉右衛門丈、右横隣は古河財閥の総帥古河從純氏がそれぞれ住まっておられた。古河家には大きい立派な防空壕がつくられておって、私の家族は、よくその防空壕を利用してもらっていた。昭和二十年五月の空襲の時、私は正樹を連れて例の防空壕に待避したのであるが、彼は私の制するのも聞かないで壕から抜け出し、東京の夜空を真昼のように真赤に染めて降りそそぐ爆弾の雨を見ながら、「お父さん、綺麗だよ。出て見な」といいながら手をたたいているのである。その時のあどけない顔も忘れられないスナップである。

それから間もなく、牛込の家は戦災のため灰燼に帰したので、私は妻と子供を岩手県妻の親類に疎開させた。終

戦後間もなく、本郷に居を定めるまでの数ヶ月間、正樹は岩手県の小学校に通学していたが、親類には醤油屋もあれば食料品店もあり、さらには呉服屋もあるという具合で、何不自由なく戦争末期をすごさせてもらった。九月に帰京してからは、正樹は最寄りの千駄木小学校に通った。有名な落語家志ん朝さんとは同級の幸運を担っていた。四年生になってからは、もとの暁星学園に復帰した。当時フランス語を担当されていた大橋先生に見出されて、フランス語の演劇に出してもらったのが、とても嬉しかったようである。

暁星学園の初等科から中等科を了えて、彼は成城学園の高校に入学し、それから三年間最寄りの国電日暮里駅から新宿を経由して小田急線で通学した。病弱だった彼も高校時代からはメキメキ体力が充実して、活動も活発になっていった。小野嘉寿雄先生の愛情のこもったスパルタ式な教育で随分と鍛えられた。小児科の和田先生夫人の紹介で本郷のテモテ教会に日曜毎に通うようになり、同教会の高瀬恒徳先生御夫妻に私淑するようになったのもその頃のことである。その道縁は彼の死まで続き、告別式もまた同教会で、高瀬先生の司祭の下に行なわれた。

成城学園の高等部から慶応大学の法学部に進んだのは、

昭和三十一年の春であった。大学に入ると例によって運動各部からの勧誘があつたが、私は正樹から「合気道をやらせてもらいたい」という申し出を受けた。「合気道」なるものがどんなものか、全くの門外漢であつた私は、ちよつと返答に窮した。彼は異常なまでに真剣で、自分の全てをこの道に賭けるといわぬばかりの意気込みであつた。私は已むなくこれを認めたのであるが、全国各大学にさきがけて慶応に「合気道部」ができたのはそれから間もなくのことであつた。その創始に彼も一役買ったことであろう。植芝先生との道交さらには竹中脩介君等との交友は、この合気道を媒体して恵まれたものである。クラス・メートには鈴木茂夫君、森田正雄君、牧野恒久君等がいて兄弟以上の交わりを、終生続けることができた。彼の病床を見舞うことを日課のようにしてくれたのもこの人達であり、彼の死を最も悼んでくれたのもこの人達であつた。

慶応では内山先生のゼミナルで、近代の国際政治史を専攻していたようだ。その勉強ぶりをじつとみておると、正樹は、私によく似て、どちらかといえばパトス的で、事実を綿密に蒐集したり、それを徹底的に掘り下げて究明するような性質ではなかつたようだ。事態の推移を後付けることよりも、そこで働く人物に興味を惹かれていたように

思われた。

彼は人と人の関係については、神経質なまでに細心かつ周到で、またとことんまで親切でもあつた。私の健康に対する配慮は妻以上であつた。祖父に対するいたわり方も格別なものがあつた。眼や足がやや不自由になつてきた祖父の眼となり足となつて、各地の温泉を巡つたり、景勝の地を遍歴したりしてくれた。弟妹に対してはその欠点を指摘するよりはむしろその長所を賞めて、よく励ましていたようであつた。とりわけ不幸な人々に対する同情の念が篤かつた。大学在学中も、眼の見えない高校生達のために毎週定期的に護国寺付近にある盲学校に行つて、彼等のもともめる本を読んであげておつたことを私は後になつて知つた。また、その人達を自宅に招いて、食事を差上げたり、音楽を聞かせたりしたことも何回かあつたようだ。家のお手伝いさんと自分達家族との間に、食事その他の処遇に少しでも差別があれば、それは彼にとつて耐え難いことであつたようであるが、自分にさせたものである。最近になつて判つたことであるが、自分の限られた小遣いをさいて、何年もの間貧しい友の学費を補給しておつたようだ。

慶応卒業後、私は正樹を神崎製紙株式会社に預ける決意をした。私の敬慕する先輩加藤藤太郎同社長の膝下で、

二、三年訓練させていただいた上、自分の下に引取るうと
いうのが私の計画であつた。彼も素直にそれに同意し、私
の親友遠藤福雄君の管理下にある同社の尼崎工場に入れて
もらったのが昭和三十五年四月であつた。そこで彼は数ヶ月
かかつて紙の製造工程を最初から最後まで工員とともに
働いて、工程管理の實際を勉強した。その後企画室に入つ
て、原価管理の仕事をやっていたようである。私は工場と
いつてもそれは一つの巨大なヒューマン・リレーションズ
であるから、各工程で働く人々と本当の友となり、お互い
に知り合い触れ合い感じ合わなければならぬ、仕事と人
が二重写して自分の目に映ずるようにならなければ、本当
の原価管理等はできるものではないということを繰返し注
意していた。彼もそのことに興味と誇りをもっていたよう
である。

彼が尼崎勤務中、自宅に帰ってきたのは正月休みだけで
あつたが、帰宅するや否や友人との打合せをしてすぐ出か
けて行つたり、大勢の友達を連れて帰ってくるという始末
で、終始ジツとしておれなかつたようである。永い間せき
止められていた友情の流れを、一度にとり戻そうとしてお
るように見えた。私がたまたま大阪や神戸に行くと、その
行き帰り、必ずのようにホームの片隅からヌーと出てきて

握手を求め、「いらっしやい」とか「気をつけて」とかだ
けいって、すぐまた人波のうしろにかくれてゆくのが常で
あつた。私にとつてその大きい手のぬくもりと重量感がた
まらなくなつかしい。そして、その間、一度も小遣いをね
だられたことがなかつたのが今では悲しい思い出である。

二年余りの修業がすぎたので、昭和三十七年の春、私は
神崎製紙にわがまをいって正樹を引取らしてもらつた。
前々から妻は彼を二、三年ドイツに留学させることを希望
していたが、私は本来留学ということを好まなかつた。外
国に留学することは外国を学ぶということだけではなく、
それを通して日本をよりよく知るための方便に過ぎない。
そのためにはそう永く滞在する必要はない、旅行だけでた
くさんだというのが私の考え方であつたので、正樹に外国
旅行をさせることにした。

昭和三十七年七月一日、四十ヶ国におよぶ野心的な計画
をみずから立てて、彼は勇躍羽田を立つてハワイに向けて
出発した。たまたま私は彼が出發して間もなくの内閣改造
によつて、官房長官から外務大臣になつた。そのことを口
スアンゼルスで知つた彼は、父が大臣になつた以上在外公
館で厄介になつたりしては迷惑をかけることになるという
ので、終始自分の身分を秘して北米と南米の各地を旅行し

たようである。その年の九月、国連総会出席のため、私はニューヨークに行きそこで彼と落ち合った。

これから欧州にかけて、約二週間、彼は私の私的随員という格好で一緒に旅行した。着替えから洗濯物までいちいち世話をしてくれた。彼の語学力は英語、仏語とも至って弱くかつブロークンであったが、なかなか大胆で日常の用を足していたばかりか、訪問国の外相その他の要人とよく談笑していた。とりわけオランダの外相ルンスさんと余程気が合っていたようである。ローマ法王ヨハネス二三世に謁見を許された時はいやに緊張していた様子であった。私はその時、アメリカからロンドンに渡り、パリ、ローマ、ボン、ブラッセル、ヘーグを経てアムステルダム經由帰国したので、正樹とはアムステルダム空港で別れた。その後、彼は欧州を単身旅行中ウィーンで歩行が不自由となり、己むなく二十日間も内田大使の公邸で厄介をかける始末になった。彼の生命を奪った難病はすでにその当時から潜伏していたのだ。内田大使御夫妻や御家族のお心のこもった看護でやや小康を得たので、彼はアフリカ、中近東、東南アジアを回って約束通りクリスマスまでの前日帰国した。

春になったので、私は彼を郷里香川県の方に挨拶がてら旅行させた。彼は香川県生れではないが、香川県人だとい

う強い自覚をもっていた。学生時代も休暇の時は墓参によく帰ったものだ。彼は讃岐の春を心ゆくまで味わうつもりでいたようだ。たまたまその途次、彼は坂出市の親類森田家に投宿した。森田夫人がたまたま眼科医であるところから、正樹の眼球に原因不明の出血を発見して、病態の容易でないことを注意されたので取急ぎ帰京した。帰京後東大病院で診察を乞うたところ、どうもこれはベーチエツト病という世界的にも例の乏しい難病であろうということであった。そこで直ちに東大病院に入院して鋭意加療に努めたが、病状は日増しに悪化の道を辿るかのようであった。私どもは東大の治療に加えて、注射、投薬、服薬、さらには指圧、マッサージ、遂には加持祈祷の類に至るまで、百方手を尽し懸命の努力を傾けたものである。

しかるに眼の出血はその後もやむことなく、遂に右眼は失明に近い状況になった。病気は漸次足の神経をも侵し、歩行中幾度かバランスを失って倒れることがあった。その度ごとに黙って涙をかみしめつつも、少しも愚痴めいたことはいわなかった正樹であった。身は病床にあって死の淵に近付きつつある苦闘の毎日であったのに、ひたすら私の健康を心配し、食事や睡眠の時間についても、こまごまと家族の者に指示していたようであった。私になるべく早く

外相という激職を御免蒙りなさいと、勤めてくれたことも一再ならずであった。付添いの看護婦さんによく本を読んでもらったし、ラジオの放送はもらすことなく聞き、私の国会答弁や討論会についても、自分の感想や評価をその都度率直に話してくれたものである。池田首相や田中蔵相の答弁や発言は、口調までもまねられるほどになっておった。好きな音楽の鑑賞も怠るところがなかった。しょっちゅう彼を見舞ってくれた友人知己は、かえって彼に激励されましたといってくれるありさまで、病床にありながら、彼の一日一日は、それ自体立派な生活であつたと思う。

三十九年の春は逝き、いつの間にか青葉の五月を迎えた。東大病院に増改築工事がはじまって、環境が喧騒になつてきたので、主治医の方に往診を願うことにして、静かな自宅で療養させるべく私は彼を退院させた。その後病勢は一向に好転のきざしをみせず、眼の力は衰え、手足の神経も順次侵されていった。しかし、彼の心境は、それでも少しも乱れることなく、いつものように自分のことよりも他の人々のことを案じ、励ますことに終始した。八月五日より六日にかけて病魔は遂に他の内臓を決定的に侵してきたとみえて、六日の午後五時、高熱の中で「旅に出るから靴の用意をしろ」という言葉を最後に、私をはじめ家族の見守

る中に、間もなく心臓マヒを併発し、遂に絶命したのである。たまたま父の生前分け与えていただいた多磨霊園に、彼は私にさきがけて、彼が最も慕っていた祖父とともに永久の眠りについた。キリスト教が日本に渡来のおり、若年ながら従容として殉教死したパウロ・ミキという少年があつた。彼は生前いたくこの少年に傾倒していたので、洗礼を受けた際、その名をそのまま自分のクリスチャン・ネームとしていた。私は「パウロ・ミキ大平正樹」と書いた小さい墓碑を立ててやった。それは父であり友であつた私の最後の贈り物となつた。一冊の聖書と十字架、彼が好きであつたオモチャの自動車や、病中放すことのなかつた人形やレコード、そついつたものを抱いて、彼は息つく暇もなく活動し続けた二十六年の有限の生涯を閉じて、別に構えられた世界に立出して行つたのである。

正樹との別離。それは私が夢にだに考えなかつたことである。しかるに非情にもそれは動かし難い現実となつた。凡夫である私は生くる希望と情熱を失いかけた。彼はなにもにも代えられない、いわば私にとっては全部に近い存在であつた。重い鉛のような悲愁が、鋭利な刃物のような力で今なお私の胸を刺し続けている。時日の経過によつても、その力は一向に衰えをみせない。